

# 長野県の疏水百選



## 疏水とは

日本では、古代から近代にいたるまで水田を中心とした国造りが行われてきました。急峻な地形、モンスーン気候といった厳しい条件下で、国土を保全し、狭い耕地ながら多くの人口を維持するためには、水田社会の形成はいわば必然の選択だったとも言えます。

水田は多量の水を要します。米の出来不出来は水の管理次第。先人は、水を得るため何10kmと離れた川に堰を築き、村まで水路を引いてきました。水田造りは、とりもなおさず水路造りを意味します。田や村が増えつづけるたびに水路もまた増え続けました。

2千年にわたって営々と築かれてきた農業用水路。その総延長は実に約40万km。地球10周分に相当するほとんど無数の水路群が、細かい網の目のように日本の国土に張り巡らされています。

『疏水(そすい)』とは、この水路造りや水路網をあらわしています。  
先人が築いた疏水は、現在も脈々と私たちのまわりを流れています。

## 疏水百選の選定

日本三大疏水をはじめとする歴史ある疏水の多くは農業のための用水で、その延長は約40万kmにもおよび、日本の農地・農村をすみずみまで潤してきました。これらの疏水は、食料の安定的な供給の基盤であり、地域振興の要の役割を果たします。さらには、国土・環境保全、保健休養、美しい景観の形成など様々な役割をも持った国民共有の資産です。

疏水は、これまで農家を中心とする地域の共同作業によって守られてきました。しかしながら、近年の農村地域の過疎化や高齢化により水路の管理や定期的な草刈り、土砂上げなどの手入れが困難になってきています。

こうした疏水の役割が今後とも維持され、美しい農村の景観と国土が守られるためには、農家のみならず地域住民や都市の人々も含めた国民全体でその保全活動に取り組み、次世代に継承していくことが必要です。こうした観点から疏水を保全する国民的運動を進める一助とするため、農林水産省は平成17年度に「疏水百選」を実施。全国で110箇所が「疏水百選」に認定されました。

## 五郎兵衛用水(佐久市)

### 疏水の所在

長野県佐久市(旧浅科村)

### 所在地域の概要

旧浅科村は長野県の東玄関口佐久平のほぼ中央に位置し、浅間・蓼科連峰の雄大な山なみと千曲の清流とが織りなす美しい自然と歴史に恵まれた田園の村です。

往古より幾多の変遷を見ながら、江戸時代には塩名田、市左衛門新田、御馬寄、矢島、五郎兵衛新田、八幡、蓬田、桑山の各村があり、それらの村が明治以降逐次合併を重ねて1955年(昭和30年)に南御牧村、中津村、五郎兵衛新田村の3か村が合併してできた村です。

現在は、平成17年4月1日に佐久市、臼田町、浅科村、望月町の4市町村が合併して佐久市となっています。

### 疏水の概要・特徴

五郎兵衛用水は、今から370年も昔の17世紀の始め、市川五郎兵衛真親(さねちか)が現在の佐久市浅科の不毛の原野を水田開発するために、その生涯と私財を投じて築いた用水です。

遠く蓼科山の山中に湧いている湧水を水源として細小路川と湯沢川の合流点(佐久市春日)で取水し鹿曲川の東側の断崖に水路を切り込み、片倉山に隧道を掘り抜き、布施の谷に導水、布施川を掛樋で渡し、百沢、八幡、矢島と山裾を回り、矢島山を隧道で掘り抜き9ヶ村を経て上原の大盤台(分水盤)に用水を引いてきたのです。村で最も高いところに水を通すために盛土をし、それは「土樋(つちどい)」「築堰(つきせぎ)」と呼ばれていますが、その長さは千メートルあまりに及んでいます。

このように五郎兵衛用水は、当時の高度な土木技術によって造られ、全長はおよそ22km。完成したのは寛永7、8年頃、つまり足かけ4、5年を要した大工事でした。

五郎兵衛用水は、市川五郎兵衛をはじめとする先人たちの血と汗の結晶でしたが、これを維持するのは大変な作業でした。五郎兵衛用水は、いわば土を固めたただけであったため、大水や落盤などでしばしば壊れてしまい、補修にも多大の費用と労力を費やしました。

こうした努力は、江戸時代だけでなく明治、大正、昭和の時代まで続けられましたが、昭和30年半ばからの五郎兵衛用水の大改修工事が行われ、およそ10年の歳月をかけて近代的な用水に生まれ変わり、安定的に用水が供給されるようになりました。

今では佐久市だけでなく、東御市、小諸市の一部までを潤す大切な用水となっています。



## 塩 沢 堰(立科町)

### 疏水の所在

長野県北佐久郡立科町を中心とする周辺地域(約570ha)

### 所在地域の概要

立科町は長野県の東部、北佐久郡の最西端に位置し、南は茅野市、西は長和町(旧長門町)・上田市(旧丸子町)、東は佐久市、北に東御市の4市1町と隣接をしています。南北は26km、東西0.05～7kmと南北に細長い地形で総面積は66.82km<sup>2</sup>です。居住地は標高600～750mの田園地域と蓼科山、白樺湖・女神湖を中心とする白樺高原の観光地域に大別され、人口約8.4千人、世帯数約2.7千世帯の農業と観光の町です。首都圏への交通は、上信越自動車道佐久ICを通じ180kmで、鉄道の最寄り駅はJR佐久平駅になり約17kmの距離にあります。佐久平駅からは長野新幹線により東京駅まで約70分で行くことができます。

### 疏水の概要・特徴

塩沢堰(本堰・和見堰)は、古く江戸時代初期に初代六川長三郎勝家が蓼科山の裾野に本堰の源泉である弁天神湧水と新堰(和見堰)の源泉である水出湧水を探し当て、寛永18年(1641年)から6年の歳月を費やして正保3年(1646年)に堰延長約55kmの塩沢堰が完成しました。これにより、未開の台地が美田へと変わりながら次々に集落が形成されました。

その後、塩沢堰は用水量確保と近代農業に対応するため、堰を統合し幹線水路の建設やかん水施設の整備により、良質米栽培・りんご栽培の規模拡大が可能となり里の農業地域は大きく発展しました。

また、水道水源や親水公園などの地域用水としても広く活用されているだけでなく、土型や石組みを多く残す塩沢堰の水辺空間や、この疏水によって貯えられた女神湖には美しい自然を求めて年間200万人の観光客が訪れる観光地へと発展し、地域繁栄の礎となっています。



## 拾ヶ堰(安曇野市)

### 疏水の所在

長野県安曇野市(旧南安曇郡豊科町、堀金村、穂高町)の周辺地域 1,000ha

### 所在地域の概要

長野県のほぼ中央、松本盆地の北西に位置し、西側に雄大な北アルプスの山並みと三方に梓川、穂高川、犀川を配す自然豊かな地域。安曇平、あるいは安曇野と呼ばれている。

### 疏水の概要・特徴

拾ヶ堰は、文化13年(1816年)複合扇状地の中央を約570mの等高線に沿って横切り約1000haの水田を潤す総延長約15kmの安曇野一の大水路である。長さ約15km勾配は約3000分の1で、近代的水準器や望遠鏡もない時代、クワやモッコだけによる手掘りの水路である。工事は着手からわずか3ヶ月という驚異的な早さで完成されている。

一級河川奈良井川より取水し、安曇野市(旧豊科町、堀金村、穂高町)の水田を潤し、一級河川烏川に注いでおり、今現在も大幹線水路として、安曇野の用水供給源としての役割を担っている。当時はかんがい面積が旧村で10か村にもおよんでおり、10か村を潤すというので十箇堰(拾ヶ堰)という名が付けられた。



## 善光寺平用水(長野市)

疏水の所在

長野県長野市

所在地域の概要

本地域は、名前の由来でもある国宝「善光寺」と、その門前町を中心に市街地・商業地域が発展し、その周辺部に住居地域があり、さらにその周辺部に耕地が広がっている。このため、用水路は長野市西部を流れる裾花川と犀川から取水し、上流域の県庁などがある市街地を通過して、その下流に広がる農業地帯にかんがいするという全国的にも珍しい特徴がある。

疏水の概要・特徴

本用水路は、中世以前から当時の実力者により開発され、広く水稻栽培が営まれており、用水もまた「善光寺平用水」と称されて古くから親しまれてきた。その昔、善光寺平用水の主水源は裾花川のみであったが、水源が乏しく、大正末期から昭和初期にかけてしばしば絶対量が不足し、早ばつによる水争いも生じるようになったため、昭和6年度から10年度にかけて改修工事が実施された。この改修により裾花川・犀川の両河川に頭首工を新設、幹線導水路を造成整備し、犀川からの補給水を導水することで、用水量不足を解消した。

市街地としては、珍しくホタルが大量に発生する用水路であり、水路の保護活動に地元小学校、地域住民が参加している。



## 八ヶ郷用水(中野市)

疏水の所在

長野県中野市

所在地域の概要

本用水は、中野市東部地域を流下する一級河川夜間瀬川から取水し中野扇状地一帯をかんがいし、稲作をはじめ、現在では、りんご・もも・ぶどうの果樹を中心に「くだもの王国」中野を樹立し、長野県の中でも特筆した濃密な果樹栽培地帯である。

疏水の概要・特徴

八ヶ郷と言うのは、古くから夜間瀬川中野扇状地に発達した郷村による水利共同体のことである。その水源は、志賀高原の深山幽谷の水を集めて流れる横湯川と角間川が合流してなる夜間瀬川である。取水は、夜間瀬川の松崎地籍から水門を通して引水し分水タンクに流入させ八ヶ郷各堰へは規定の大きさの分水口を通して用水が送られている。志賀高原上流「琵琶池」、「大沼池」にたいしては常に貯水量の維持、確保に努めてきた。明治15年(1882年)には上信国境に位置するガラン沢より17箇所の沢水を集めて群馬県より山腹を約6km長野県側へ隧道等により引水した「寒沢堰」がある。いずれも、先人達の偉業による、引水で中野市の肥沃な農地を潤す大切な水となり「地域住民にとって水の意識の変革」をもたらしたのである。

